

痴呆症のある高齢者の看護を学ぶための効果的な実習指導の検討

日川 幸江 川崎 裕美

広島県立保健福祉短期大学看護学科

抄 録

特別養護老人ホームで実習を行なう学生が、痴呆症に対する個別な看護を生活者としての視点から理解するために、生活歴を取り入れた指導を意図的に行なった。学生のレポート「入所者のプロフィール」・「会話の記録」・「対象者の痴呆症の看護について述べる」を、過去の生活史をふまえた生活者としての視点から分析した。結果、生活歴を取り入れることが理解できた学生は、痴呆症状と生活歴とを照合させることができ、痴呆症状が示す訴えがわかりそして個別な看護を行なうことができたと考えられた。痴呆症状と生活歴を照合させることは、痴呆症に対する個別な看護を学ばせるために効果的であると考えられた。

キーワード：痴呆症状，生活歴，同調的態度，個別な看護

はじめに

痴呆症の高齢者の看護をするうえで、「痴呆症」の疾患理解と共に「個別」の視点は、特に必要でそれは他の疾患とは違う重さを持つ特徴がある。痴呆症状がその個別な生活背景を基盤に現れ、示す意味が異なるからである。同じ痴呆症状でもその意味の成り立ちは生きてきた背景が違いため、接し方も看護展開も違ってくる。しかし、生活者として対象を理解することは以外に難しい。なぜなら、痴呆症に対する看護において、その高齢者の生活のありようをつかむことはこれまで多く言われている。

生活者として対象を理解するとは、生育歴・生活歴・職業歴などから、その高齢者の人生の経過をつかむことである。高齢者が持つ過去の情報の共有者になることである。そのような看護者の接し方が個々の心理に即した対応をはかり、痴呆症状の軽減や改善の看護につながると考える。そのためには、意図的に生活歴を取り入れた会話を導き、対象の行動を意図的に生活歴から理解するということが重要となる。

本研究の目的は、生活者としての視点が理解できるよう、意図的に生活歴を取り入れることを学生に指導した結果、理解できた学生とできなかった学生が生じた。その特徴を明らかにすることにより、痴呆症に対する個別な看護をするために、より効果的な指導方法を探る事である。

実習内容

当短大の地域・老人看護実習では、地域で生活する成人・老人の健康に応じた援助を学び、保健医療・福祉の連携システムの中で看護の役割と継続看護のあり方を理解する。そのなかで特別養護老人ホームの実習は、痴呆状態の入所者の症状・日常生活動作や痴呆の程度を理解し、日常生活援助を行いながら工夫の仕方を学ぶ。この位置付けのなかで特別養護老人ホーム実習は、学生1～4名が2日間の実習を行なう。教員は1名が担当している。

実習第1日目に日常生活援助を通じて午前中に対象者を学生自身が決める。午後、入所者台帳から情報を収集し「入所者のプロフィール」を作成する。学生は対象者の入所前の生活を把握した上で接する。対象者の生きてきた過程の全体像をつかむよう、また着目すべき項目について具体的に指導する。実習第2日目は、日常生活援助場面で生活上の支障について把握する。記憶・知的障害について生活援助を介して、痴呆の特徴を理解する。対象者の痴呆のあり方と生活歴を意図的に関連させて看護について考察する。痴呆症状の軽減や改善まで看護が実施できるように指導する。

研究方法

1. 看護実習の学生への指導方法

H短期大学3年生 地域・老人看護実習カリキュラムの特別養護老人ホームで実習した44名である。研究期間 平成11年度 4～9月。

実習では、痴呆症の高齢者の看護について学ぶ旨を伝え、実習の2日間では痴呆症の理解には、意図的に生活歴を使って生活者としての視点から看護について考察することを指導した。

2. 分析方法

レポート「入所者のプロフィール」として、生育歴・生活歴・職業歴などの情報を収集したものと、レポート「会話の記録」と「対象者の痴呆症の看護について述べる」から分析した。

レポート「会話の記録」で生活歴を取り入れた会話の有無によって学生を2群にわけた。生活歴を取り入れた会話とは、その会話の展開に生活歴の情報を使っていることの有無、生活歴の情報をふまえて対象をとらえていることの有無から学生の記述を抽出し、教員が分類した。この2群の特徴を「レポート：入所者のプロフィール」(以下「入所者のプロフィール」という)と「レポート：会話の記録」(以下「会話の記録」という)と「レポート：対象者の痴呆症の看護について述べる」(以下「痴呆症の看護」という)から明らかにした。さらに、「会話の記録」と「痴呆症の看護」で学生の痴呆症の理解を判定した。この「会話の記録」と「痴呆症の看護」は実習終了後に書いている。

3. レポート課題の精細

1) 「入所者のプロフィール」を作成する。

—指導目的—

- (i) 入所前の生活状況を把握することで、その人なりの生活を再構築し、イメージする訓練をする。家族構成・生活歴・生活習慣・性格などから生活者としてとらえていく。
- (ii) 特別養護老人ホームに入所した経緯とその処遇計画、日常生活上の障害から身体上・精神上の障害の課題について、介護を必要とする生活について理解する。
- (iii) 日常生活動作上の不都合を明らかにして、痴呆症状との関連を考える。

2) 「会話の記録」と「痴呆症の看護」を記述する。

—指導目的—

- (i) 会話の記録では「入所者のプロフィール」を作成し、対象理解の段階を進めた上でどのように相手の言動が分析・解釈できているかをみる。その

結果から私はどう感じ・どう思ったのか確認する。意図的に生活歴を取り入れた分析をする必要性を指導する。これらの過程から個別な痴呆症の看護につながることを指導する。

結 果

1. 実習指導の結果の分析

生活歴を取り入れた会話をするために、生活歴の情報を道具として使うこと、生活歴の情報をふまえて対象をとらえることを指導した。その結果、実習終了時点で学生44名のうち17名はその事が理解でき、27名は理解できなかったと評価した。(この評価は指導教員が、生活歴の情報の有無・生活歴の情報をふまえた対象の理解の有無によって評価した) この結果には学生と対象の痴呆症の高齢者との状況が関係していると考え、1) 痴呆症の高齢者の状態や2) 学生の学習状況について分析した。

1) 痴呆症の高齢者の状態

(i) 意思疎通の段階による違い

表1 生活歴から効果的な会話ができなかった学生とできなかった学生の意思疎通の段階による違い

疎通	可 能	時に通じる	不 可	計 (人)
できた学生	3	12	2	17
できなかった学生	7	17	3	27
	10	29	5	44

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生をみると、意思疎通の段階での関与はみられない。意思疎通が可能なのが会話をするための因子にはなっていない。意思疎通が時に通じる状況であっても会話はできている。痴呆の疾患の特徴として、言語による意思疎通の困難さがあるがそのことによる影響はない。(この意思疎通の段階は入所者台帳からの情報である。)

(ii) 痴呆の段階による違い

表2 生活歴から効果的な会話ができなかった学生の痴呆の段階による関係

痴呆	中等度	高度	最高度	計 (人)
できた学生	0	14	3	17
できなかった学生	9	12	6	27
	9	26	9	44

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生について、痴呆の段階による違いをみると、痴呆が中等度では0名・高度では14名・最高度では3名である。痴呆の段階が中等度では、正常な反応か痴呆の症状かわかりにくいことが影響しているのか、生活歴を取り入れた会話ができなかった学生は0名であった。生活歴を取り入れた会話をするとき、痴呆の段階は痴呆が比較的わかりやすい高度であることが適していると考えられる。高度の段階は、痴呆による記憶や知能障害が進むために、生活への支障が増え痴呆症状の訴えが多くなる。痴呆症状がわかりやすいことも大切である。(この痴呆の段階の評価は入所者台帳からの情報で、評価方法は柄澤式老人知能の臨床的判定基準によるものです。)

(iii) 特定の対象者による偏り

学生自身が痴呆症の看護について学ぶ対象として決めたのは、約100名の入所者のうち(44名の学生の選択が重複して)20名である。この20名のなかで、2名以上の学生が重なって対象とした高齢者は10名であった。この10名について生活歴を取り入れた会話ができなかった学生とできなかった学生の人数割合をみると、約1対1であった。その10名のどの対象者においても会話ができなかった学生の存在があった。

2) 学生の学習状態

(i) 情報の収集状況

「入所者のプロフィール」の入所前の家族構成・生活歴・生活習慣・入所理由・処遇計画・疾患(痴呆を呈する疾患の有無についても記す)・痴呆症状・痴呆評価・日常生活上の支障についての情報収集の状況を見ると、生活歴を取り入れた効果的な会話ができなかった学生もできなかった学生も「入所者のプロフィール」への記載はできている。情報収集の状況に特に違いはなく、紙面上の生活歴の把握はできている。

(ii) 「会話の記録」の特徴

① 注目した項目

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生17名が注目した項目は、痴呆症状・7名、知的能力・5名、施設の生活・4名、生活歴・1名である。できなかった学生27名は、痴呆症状・9名、知的能力・5名、施設の生活・10名、生活歴・3名である。2群とも痴呆症状や知的能力などの痴呆に関すること・施設の生活について注目している。痴呆症にかかわること及びその生活の状態に関心を持って観察していると考えられる。どちらの群の学生も注目した項目は適切である。このことが会話への影響にはつながっていない。

② 会話のやりとりの内容

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生17名のやりとりの内容は、同調を示している(15名)、相違を指摘している(1名)、反射的に投げ返している(1名)である。生活歴を取り入れた会話ができなかった学生27名の内容は、場面の流れのまま(10名)、感情を受け止めていない(8名)、相違を指摘している(4名)、質問形式(3名)、相手に合わせた返事を繰り返す(2名)である。

(iii) 「痴呆症の看護」の特徴

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生17名のレポートの特徴を、①使った生活歴の項目、②内容全体の傾向の2点についてみる。

① 使った生活歴の項目

使った生活歴はどの項目に属しているのかをみると、使った生活歴は重複で延べ数32であった。家族に関する事(13)、職業歴(6)、経済状態(5)、生活の状態(4)、時代背景(2)、趣味(1)、性格(1)である。

② 内容全体の傾向

家族の話題などの生活歴を取り入れた会話ができなかった学生の「痴呆症の看護」の内容をみる。

- a) 不安・混乱を示している背景の意味がわかることで、精神的援助の具体的内容がわかり援助ができる。
- b) 対象者の生活者としての特徴的なスタイルから、個別なかわり方の必要性がわかり具体的な日常生活援助の援助ができる。
- c) 問題行動・迷惑行動の意味が、生活歴から理解でき対応の具体的内容についてわかり援助ができる。

以上のように、個別な看護について述べている結果が得られた。

対象の不安・不穏・興奮などの症状が軽減・緩和できたことで、学生は痴呆症の看護には、過去の生活者としての情報が必要であると述べている。

生活歴を取り入れた会話ができなかった学生は、痴呆症状や知的能力に注目し観察しているものの、痴呆症状の確認がとれたことで終わり、対象者自身の場合について、理解することができず痴呆症の看護の一般論を記載している。

考 察

学生が痴呆症に対する個別な看護をするために、意図的に生活歴を取り入れて対象の言動を理解することを指導した。山本は「痴呆性老人の言動や感情を引き出す看護援助で高齢者の感情表出を受け止めるサインを獲得する・話を聞く姿勢でそばにいる・話し掛けるなどから言動や感情を引き出す」⁴⁾と述べている。痴呆

症の高齢者からの感情表出のサインをいかに受け止められるかは重要でそのためにも生活歴をふまえた対象理解が必要となる。それらを意図した実習指導の結果、生活歴をふまえて効果的な会話ができなかった学生は17名であった。17名の学生は症状の持つ意味・背景がわかり、具体的な援助で個別性のある看護ができ、不安・混乱などの痴呆症状の軽減また緩和の援助ができたと判断された。中島は「老人の生育歴・生活歴・職業歴・若いころの性格などを知って老人の動作の1つひとつを点検しその意味を掌握することが必要である」²⁾と述べている。また五島は「個々の老人に合わせた接し方のため、性格・習慣・生活歴・ことに若いころの仕事などの情報を得ておく必要がある」³⁾と過去の生活における歴史の重要性を述べている。痴呆症に対する個別な看護をするためには、生活歴に関する情報は必須である。個人の過去の生活スタイル・あり方をつかんでこそ、対象のニーズにあった看護になるからである。これらを学習させるべく指導したが、理解が難しい学生がいた。生活者として対象をとらえることは、一見たやすそうでは意外とできにくい面があることを示している。

生活歴を取り入れた会話をする事ができたと考えられた因子を、対象者側と学生側から述べる。対象者側からは、特定の対象者による違いが考えられたが、特定の対象者による偏りはみられなかった。痴呆の段階による違いは、痴呆が中等度でわかりにくい段階と最高度で反応が得られにくい段階より、高度の段階に集中している。このことから対象の痴呆の段階は、記憶や知能障害に伴い痴呆症状が明確になる高度の段階が望ましいといえる。学生側からは、生活歴の情報の収集状況に差異はない。注目した項目は、どちらも痴呆症状や知的能力に注目している。痴呆症にかかわること及びその生活の状態に関心を持って観察している。会話の内容の多くは、同調的なものであった。学生は同調的な言語や態度で接している。痴呆症状が意味を持つ症状であることがわかったことで、同調的態度をとることができている。対象者の話に傾聴できるようになる。対象の言動の理由が理解できることで学生の態度の変化がみられる。なぜ対象がその様な行動をとるのかその理由がわかることは重要である。痴呆症の看護で使った生活歴の項目は、家族に関することである。これは学生自身の生活体験からもっとも会話しやすい項目であったためと考える。内容全体の傾向としては、生活歴を取り入れた具体的な援助方法から、個別な看護の重要性について述べている。

次に、生活歴を取り入れた会話を阻害していると考えた因子を述べる。生活背景の情報収集はできているが実質的な把握ができていない。これは、痴呆症状が生活背景を基盤に症状が現れることを理解していない

ためと考える。実習中にこれらの確認を行なう必要がある。具体的な方法としては、情報収集ができたところで全体像をイメージした内容を発表させて、痴呆症についてまた生活者としての背景のつかみ方を補足する必要がある。会話のやりとりの内容からは、生活歴を取り入れた会話のできなかった学生の「場面の流れのまま」「感情を受け止めていない」「相違を指摘している」に共通しているのは、その痴呆症状の意味がわかっていないために生じた結果であると考えられる。痴呆症状の解釈ができていないために、かかわりを見出せずに場面を流したり、その対象者の思いをくみ取った反応が返せなかったり、指摘してはいけない相違を指摘している。また、もともと学生個人の行動特性として同調的な行動が苦手な学生もいる。その様な学生への配慮も必要である。そしてもっとも阻害している要因は、痴呆の特徴的な症状が観察できたところで学生の思考が終わってしまうことである。個別な生活歴との照合を行わず、観察した痴呆の特徴的な症状と痴呆症の一般的看護をつないで、理解できたと学生が考

えることである。痴呆症の一般的看護で終わることがないように指導のあり方をさらに検討する必要がある。

これらのことから、学生が痴呆症の高齢者の生活歴を取り入れて理解し看護できる過程を図1のように考えた。学生が痴呆症の高齢者の行動をみたとき、痴呆症状と生活歴を照合させることで行動の意味が理解できる。痴呆症状である行動の意味を理解することにより、同調的な態度がとれて効果的な会話ができる。対象の行動を意図的に生活歴から理解することで個別な視点から看護が展開され、痴呆症の高齢者の症状が軽減・緩和すると考える。この過程を繰り返しながら、痴呆症の高齢者の行動を意図的に生活歴と照合させて看護の過程をふんでいくが、当短大の特別養護老人ホーム実習は期間が2日間のため、高齢者の症状の変化まで確認できればよいと考える。実習に時間的な制限がある場合には、この過程は学生に気づかせる展開方法ではなく、痴呆症状と生活歴の関連づけを最初から具体的に示して援助する方が望ましい。

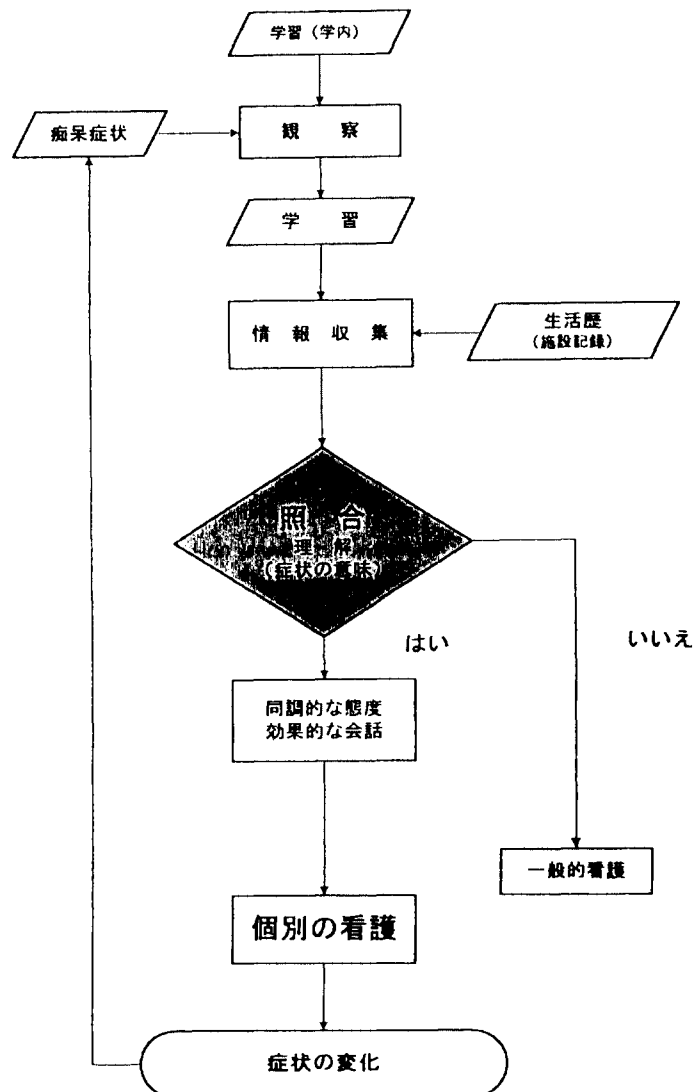


図1 学生が痴呆症の高齢者を理解する過程

表3 痴呆症に対する看護の効果的な指導方法

<p>① 対象の痴呆は、高度でわかりやすい段階が適切である。</p> <p>② 痴呆症状は生活の背景を基盤に現れることを指導し、考察の過程の動機づけをする。</p> <p>③ 痴呆症状と生活歴を具体的に関連づけ、痴呆の意味を理解させる。</p> <p>④ ③を基にして、同調的に会話を展開させていくこと。</p> <p>⑤ 看護行為により、対象の不安・不穏・興奮などの症状が軽減・緩和できることを体験させる。</p>
--

次に、図1に示した過程をよりスムーズにするために、痴呆症に対する看護の効果的な指導方法として教員の働きかけを表3に示した。このように指導することで痴呆症の高齢者の理解しにくいと思われる言動にこそ、その人の訴えが込められていることがわかる。個々の対象者側に立って、その生活歴からつながっている本人の思いをくみ取ってこそ、個別な対応が展開できると考える。また、学生が陥りやすい過程は、痴呆の特徴的な症状が観察できたところで終わり、個別な生活歴との照合をせずに、観察できた特徴的な症状と痴呆の看護の一般論とをつなぐ過程で終わることである。痴呆症状の確認ができたところで終わらないこと、痴呆の看護の一般論では看護はできないことを指導する必要がある。

この研究では「会話の記録」と「痴呆の看護」の記録の内容を分析し、学生の痴呆の理解を判定した。この記録の内容には、痴呆症状と生活歴の照合の有無によって、学生の「痴呆の看護」の内容が二分されるので、理解の程度が明確に現れていた。したがって実習目標の到達度を判定する方法として「会話の記録」と「痴呆の看護」を使用することは有用であることも示された。

まとめ

本研究は、痴呆症に対する個別な看護をするために、生活者としての視点が理解できるよう、意図的に生活歴を取り入れて対象を理解する実習指導のあり方を探った。その結果、痴呆症状と生活歴の照合の有無が重要な過程であることが明らかになった。

文献

- 1) 長谷川和夫. 老年期痴呆診療マニュアル. 上田慶二, 大塚俊男ほか編. 東京, 日本医師会, 120, 1995
- 2) 中島紀恵子, 竹内孝仁ほか. 系統看護学講座, 専門19老人看護学. 東京, 医学書院, 273-304, 1995
- 3) 五島シズ, 水野陽子. 痴呆性老人の看護. 東京, 医学書院, 23-33, 1998
- 4) 山本広美, 佐藤弘美ほか. 痴呆性老人の言動や感情を引き出す看護援助. 第29回日本看護学会論文集 老人看護, 106-107, 1998

Investigation of effective training to learn nursing for aged people of dementia

Yukie HIGAWA and Hiromi KAWASAKI

Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

To learn nursing for each dementia patients from a viewpoint of individual daily life, the nursing students who have practical training in a nursing home was guided in considering the life history of patients particularly. Reports of the students regarding "profiles of aged people cared in the facility", "records of conversation", and "impressions of nursing dementia" were analyzed considering the past history of patients. As a result, students who considered the life history of patients could compare the symptoms of dementia with the life history of patients, could understand the complaint expressed by a certain symptom of dementia, and could perform individual nursing. Therefore, it was considered that comparing symptoms of dementia with the life history of patients is effective for learning nursing for dementia.

Key words : nursing for dementia, symptom of dementia, life history, synchronous attitude